

表2 関東大震災の経緯とプールの逃避行の時系列、9月1日15時から2日24時まで

	推定時刻・天候、地震・火災の状況	場所・船・建物、道路・壁の状況	O. M. プールの行動、他の人の動き
9月1日15時以降	15時：火災の炎は埋立地周辺に迫る。	横浜の居留地・海岸道通り・日本人町も燃えている。北の神奈川方面も燃えているのが見えた。	プールなど崖下に下りた人達も周辺からの炎で身動きできないのでぼんやりして過ごした。
	16時：海岸通りのグランド・ホテルなどの建物はまだ燃えていた。	港にいた船舶の中には、防波堤を抜けて湾内1マイルの沖で錨を下ろしていた。	スペイン駐日公使ドン・ホセ・カーロが山手から逃げて来る時、プールの自宅がひどく燃えていたと報告した。
	16時30分：居留地全体が燃え尽き始めていた。	エンプレス・オブ・オーストラリア号は出向せず、棧橋に繋がれダイミヨウ号もフランス波止場に見えた。	プール、義父キャンベル（提督）、ペイトマンは偵察に出かけた。
	16時40分：海岸通りの方向（西南西の風）に風向が変わっていた。	炎は海岸通りを横切らず、歩けるようになった。オリエンタル・ホテルは燃え尽き半数の宿泊客は死んだ。ポートハウス付近はほとんど燃え尽きていた。	3人はフランス波止場のポートハウスまで行くことができた。周辺はかなり熱かったが、のろのろと歩いて、海岸までたどりついた。海に飛び込んだ人たちが幽霊のように立ち上がってきた。
	あてにならない風がまた沖合に向かって吹き、窒息するような熱気となった。		プールと提督はダイミヨウ号に乗り込む方法を考えている時、窒息するような熱気の中、老水夫のイチと会うことができ、掘割の入り口まで戻った。
	19時：暗くなりかけた。	多くの負傷者をオーストラリア号などの外国船に小舟で運び上げる作業が続けられた。	プールは家族や外国人の避難者を連れて、小舟を借り上げダイミヨウ号に向かい、乗船した。強いウィスキーを飲みうまかった。
	深夜になっても横浜は燃え続けていた。	横須賀海軍基地は火災が多く発生し、横浜に船を送って日本人などを救出する行動は見られなかった。	プールは家族や外国人の避難者を連れて、小舟を借り上げダイミヨウ号に向かい、乗船した。強いウィスキーを飲みうまかった。
		燃料用の石油は漏れて次第に海に広がり、爆発が起こり、吹きまくる煙で一杯となった。	ダイミヨウ号は混み合ってきたので、プールの家族などは大型ヨット・アズマ号に移った。二人の負傷者は大型船に移し治療させた。
			プールは固い船室の上に横たわっていたが、目を開けると何時間も燃え続けているのが見えた。ドロシーも時々起きて横浜を見ていた。
		市内の公園や居留地で大火をやり過ごした人々がオーストラリア号などに来て、救出された。	大型ヨットにいても十分な食糧がないので、全員がオーストラリア号に向かい、乗船を許可され、暖かい朝食を提供された。
		横浜ユナイテッド・クラブ（5階建て）は一瞬のうちに倒壊し、建物にいた人達はほとんど死亡した。	オーストラリア号には多くの避難者が逃げてきて助かったが、船上では多くの外国人が死亡したことが話し合われた。
		9時：横浜市内の火災はほぼ鎮火した	プールと提督は小型船でダイミヨウ号に行き、上陸して会社と自宅付近の状況を偵察に行くことにした。
		1時間に1度位の余震があった。	グランド・ホテル付近に上陸したが、ドットウェル商会を含め、居留地内の建物は焼け跡の熱気で近づけなかった
		外人墓地の墓石は散乱していたが、山手の街路の状況から、震災前の状況が推定できた。	山手の我が家に向かって進んだ。山手の外国人邸宅（68番地の我が家など）は燃え尽きて、70年前の開港以前の状態に戻っていた。
	9月2日0時～24時	居留地付近は漂う煙で霞んでいた。燃えて葉のない真黒な木々が立っていた。	ヘクト山（代官坂）でN.F. スミスにあったが、父親と若妻子供が死亡したことを理解できていなかった。
12時：風向きはくると向きを変え、沖の方へ吹き付けた。		朝鮮人暴動の流言や根岸の刑務所から解放された収容者などで騒然としていた。	代官坂を見下ろすと、灰塵となった元町、破壊された掘割の護岸、その先の漂う煙で霞んで見える居留地以外何も見えなかった。
油の炎が大棧橋に向かってきて危険な状態になりつつあった。		税関の向こう側にあったタンクから港方向に流れ出していた黒い燃料油に火が付いて、向かってきた。	プールと提督は海岸通りに戻り、ダイミヨウ号に乗船して、昼食を取った。老水夫のイチはヨットの帆などをたたんで待っていた。
刻々と炎は2艘の大型船に近づきつつあって、危険な状態になった。		濃い赤色の炎が近づいてきたので、ヨットの帆を掲げるひまもなく、港の入口付近に移動した。	私たちは、半マイル（800m）先のオーストラリア号で起こっている恐るべき事件をただ呆然と見守っていた。
前進してくる火の手が大量の黒い煙を吐き出し、薄暗がりの中で覆い隠した。		オーストラリア号とナビゲーター号は錨を繋ぐ鎖が絡み合い動けず、船員は斧で鎖を断切ることになった。	プールと提督は2艘の大型船の動きを途方にくれて見ているよりほかになかった。
強風が吹き出し、刻々と炎は二艘の大型船に押し寄せつつあった。		大棧橋に避難していた日本人たちは助けを求めて金切り声を上げ、近くの小型ランチに乗って逃げ出せた。	オーストラリア号には多くの外国人の避難民（プールの家族を含む）が乗船して、非常に危険な状態になっていた。
岸では潮が急速に引き始めていた。		大型船は切り離されて、オーストラリア号はゆっくりと棧橋から離れ始めた。	プールと提督は大型船の動きを見つめていた。
		オーストラリア号の乗組員は消火ホースを出して、船の両側と大棧橋に放水していた。	プールたちは差し迫った危険を感じ、ダイミヨウ号の帆を上げることもできなかったが、港の入口まで移動することができた。
		オーストラリア号は前進して小型船の群を突っ切った。多くの小型船の船員は海中に放り出された。	プール達はオーストラリア号の船長がほんとうに「気がいいになってしまった」と信じ込んだ。「ヤメロ、ヤメロ」と叫んだ。
		オーストラリア号は突然停止して、向きをプール達の乗るダイミヨウ号の方向に向けてきた。	オーストラリア号の一等航海士は、ダイミヨウ号にパイを離して動くように叫んだので、義父キャンベルは仕方なくパイから離れた。
		オーストラリア号は巨大な船体をダイミヨウ号をコルク栓のように洗い流して通り過ぎた。	オーストラリア号が通り過ぎる時、甲板上の避難者たちが「すまないなあ」との呼び声が聞こえた。
		オーストラリア号は湾の入口に向かって出て行き、1マイル先の湾内に錨をおろした。	プールたちは大型船の動きを見て、漸く安心した。船長が的確な判断をしたことはオーストラリア号に乗船してから知ることができた。
湾内の灯台は2つとも引き裂かれて海面下に没した。		ナビゲーター号が煙の中から突然現れ、2,3ヤード付近を通過した。	ダイミヨウ号は激しく揺れ、死にもの狂いでそこから抜け出し、広大な海原に出てほっとした。
18時：薄暗くなってきた。		三浦半島は12～15フィート（3.7～4.5m）ほど沈降し、36時間後にはもとにもどった。	ダイミヨウ号を本牧の十二天の下方の湾内に置き、備え付けの小舟でオーストラリア号に戻り、乗船して家族に再会できた。
		湾内に漏れ出した油は防波堤のすぐ手前まで燃えており、プールが乗って来た小舟は暗夜に流された。	プールは顔や手は洗ったが、服装は崖をよじおりのままの服装であった。家族と一緒に夕食を食べることができた。
20時以降：	横浜公園や根岸付近に避難していた外国人のほとんどがオーストラリア号に乗船・避難することができた。	プールは船上で避難してきた人たちから、避難者の名前や様々な避難状況を聞くことができた。	
	イギリス領事代理はオーストラリア号の全員を呼び集め、翌日行方不明者を探りに行く救助隊（独身者のみとする）を組織するための会合が開かれた。	会議が終わり、プールや家族たちはやっと2日目の夜の眠りにつくことができた。	